

【第1部】基礎編（Q1～Q20）

Q1. 答え：完了の助動詞「ぬ」連用形「に」

解説：「咲き」は四段「咲く」連用形。直後「けり」は連用形接続の過去。「に＋けり」は完了「ぬ」連用形＋過去「けり」の定型。「花が咲いてしまった」。

Q2. 答え：断定の助動詞「なり」連用形「に」

解説：体言「男」＋「に」＋「あり」（う変）。「断定＋あり」は典型構文で、「～である」の意。「男であった」。

Q3. 答え：ナリ活用形容動詞「静かなり」連用形語尾「に」

解説：「静か」（語幹）＋「に」（活用語尾）で形容動詞の連用形。下に動詞「眠る」が来る修飾。「静かに眠る」。

Q4. 答え：格助詞「に」

解説：体言「京」＋「に」＋動詞「行く」。場所・方向を示す格助詞。「京に行く」。

Q5. 答え：接続助詞「に」

解説：連体形「降る」＋「に」。連体形接続の接続助詞で、原因「～ので」または逆接「～のに」の意。ここは「雨が降るので、出かけない」。

Q6. 答え：完了の助動詞「ぬ」連用形「に」

解説：カ変「来（く）」連用形「来（き）」＋完了「ぬ」連用形「に」＋「けらし」（過去「けり」連体形「ける」＋推定「らし」の「けるらし」がつまった形）。連用形に付き、下が「けり」の仲間なので完了。「春が過ぎて夏が来てしまったらしい。（夏になると）白い衣を干すという天の香具山に（衣が干してある）」。「持統天皇の歌（『新古今和歌集』・百人一首）。『万葉集』では「夏来たるらし」の形。

Q7. 答え：ナリ活用形容動詞「あはれなり」連用形語尾「に」

解説：「あはれ」（語幹）＋「に」（活用語尾）＋「思ふ」。「しみじみと思う」。

Q8. 答え：格助詞「に」

解説：体言「山」＋「に」＋動詞「入る」。場所を示す格助詞。

Q9. 答え：ナ変動詞「往ぬ」連用形「往に」

解説：「往ぬ」（立ち去る、ナ行変格活用）の連用形「往に」＋過去「けり」。「立ち去った」。「往に」で一語の動詞活用形。

Q10. 答え：副詞「げに」の一部「に」

解説：「げに」（＝本当に、なるほど）は一語の副詞。「に」を独立した助詞・助動詞と取らない。「本当にそのようでございます」。

Q11. 答え：格助詞「に」

解説：体言「都」＋格助詞「に」（場所）＋う変「あり」（＝いる）連用形＋過去「けり」。「その老人は、若い時は都にいた」。「都である」とは訳せないので断定ではない。「に＋あり」でも、「あり」が「いる・ある」の意味なら「に」は格助詞。

Q12. 答え：副詞「つひに」の一部「に」

解説：「つひに」（＝ついに、とうとう）は一語の副詞。「とうとう雪が降ってしまった」。

Q13. 答え：格助詞「に」

解説：体言「夕方」＋「に」＋動詞「着く」。時間を示す格助詞。

Q14. 答え：接続助詞「に」

解説：連体形「咲く」＋「に」。原因「～ので」または時「～と」。「花が咲くので、人が来る」。

Q15. 答え：ナ変動詞「死ぬ」連用形「死に」

解説：「死ぬ」（ナ変）の連用形「死に」＋完了「ぬ」終止形。「死んでしまった」。「死に」で一語の動詞活用形。

Q16. 答え：ナリ活用形容動詞「あらたなり」連用形語尾「に」

解説：「あらた」（語幹）＋「に」＋「造る」。「新たに造る」。

Q17. 答え：格助詞「に」

解説：体言「母」＋「に」＋動詞「会ふ」。相手・対象を示す格助詞。

Q18. 答え：完了の助動詞「ぬ」連用形「に」

解説：「咲き」連用形＋「に＋たり」。完了「ぬ」連用形＋存続「たり」。「花が咲いている」。

Q19. 答え：断定の助動詞「なり」連用形「に」

解説：体言「御使ひ」＋「に」＋「侍り」（補助動詞）。「お使いでございます」。「に＋侍り」も断定の典型。

Q20. 答え：副詞「すでに」の一部「に」

解説：「すでに」（＝もう、とっくに）は一語の副詞。「もう夜が更けてしまった」。

【第2部】標準編（Q21～Q50）

Q21. 答え：完了の助動詞「ぬ」連用形「に」

解説：「出で」下二段「出づ」連用形＋「にけり」。「月が出てしまった」。

Q22. 答え：断定の助動詞「なり」連用形「に」

解説：体言「男」＋「に」＋「おはす」（尊敬補助動詞）。「に＋おはす」も断定の典型。「（高貴な方が）男でいらっしゃった」。

Q23. 答え：ナリ活用形容動詞「あはれなり」連用形語尾「に」

解説：形容動詞「あはれなり」連用形「あはれに」＋丁寧の補助動詞「侍り」。「しみじみと感慨深うございます」。語幹「あはれ」＋活用語尾「に」で形容動詞の連用形。

Q24. 答え：接続助詞「に」

解説：連体形「更くる」（下二段「更く」）＋「に」。「夜が更けるのに、なおも語り続ける」（逆接）。

Q25. 答え：格助詞「に」

解説：体言「筑紫」（＝今の九州）＋「に」＋動詞「下る」。方向・行き先を示す格助詞。「筑紫へ下る」。

Q26. 答え：格助詞「に」

解説：「秋」＋「に」＋「なる」。「～になる」の構文では格助詞「に」が変化の結果を示す。

※「なり」が断定の「なり」ではなく動詞「なる」（成る）であることに注意。

Q27. 答え：ナリ活用形容動詞「あはれなり」連用形語尾「に」

解説：「あはれ」＋「に」（活用語尾）＋係助詞「も」＋「あり」＋詠嘆「かな」。「しみじみとしているなあ」。

※「に＋も＋あり」の形でも、上が形容動詞の語幹「あはれ」なので語尾。上が体言の「人にもあらず」（Q56）なら断定。

Q28. 答え：ナ変動詞「死ぬ」連用形「死に」

解説：「死に」（ナ変連用）＋「たり」（連用形接続の存続）連体形＋体言「人」。「死んでいる人」。

Q29. 答え：ナリ活用形容動詞「ことさらなり」連用形語尾「に」

解説：「ことさら」（語幹）＋「に」＋「急ぐ」。「わざわざ急ぐ」。

Q30. 答え：格助詞「に」

解説：体言「道」＋「に」＋動詞「迷ふ」。場所・対象を示す格助詞。

Q31. 答え：接続助詞「に」

解説：連体形「咲く」＋「に」。逆接「～のに」。「花が咲いているのに、雨が降っている」（「降れり」は「降れ」＋存続「り」で「降っている」）。

Q32. 答え：断定の助動詞「なり」連用形「に」

解説：体言「歌よみ」（＝歌人）＋断定「なり」連用形「に」＋ラ変「あり」未然形「あら」＋打消「ず」終止形。「私は歌人ではない」。「に＋あらず」で「～ではない」と訳せるので断定。

Q33. 答え：断定の助動詞「なり」連用形「に」

解説：体言「都人」＋「に」＋「侍り」。「都の人でございます」。

Q34. 答え：格助詞「に」

解説：体言「山里」＋「に」＋「住む」（連体形）＋「人」＋「なし」。場所を示す格助詞。「この山里に住む人はいない」。

Q35. 答え：完了の助動詞「ぬ」連用形「に」

解説：「降り出で」（複合動詞）連用形＋「にけり」。「雪が降り始めてしまった」。

Q36. 答え：ナリ活用形容動詞「寒げなり」連用形語尾「に」

解説：「寒げ」（語幹）＋「に」＋「見ゆ」。「寒そうに見える」。「げ」は「～そうな様子」を表す接尾語で、「寒げなり」で一語の形容動詞になる。

Q37. 答え：格助詞「に」

解説：体言「我」＋「に」＋禁止「な～そ」。「私に尋ねないでくれ」。

Q38. 答え：ナリ活用形容動詞「のどかなり」連用形語尾「に」

解説：形容動詞「のどかなり」連用形「のどかに」＋動詞「過ぐ」。「のどかに過ごす」。語幹「のどか」＋活用語尾「に」で形容動詞の連用形。

Q39. 答え：副詞「いかに」の一部「に」

解説：「いかに」（＝どのように・どうして）は一語の副詞として覚える。「いかにせむ」＝「どうしようか」。

※「いかに」を形容動詞「いかなり」の連用形とする説もある。

Q40. 答え：格助詞「に」（強意）

解説：四段「泣く」連用形「泣き」＋格助詞「に」＋同じ動詞「泣き」＋尊敬「給ふ」。同じ動詞の連用形を「に」でつないで重ね、意味を強める（ひたすら～する）。「姫君は、ただもうひたすらお泣きになる」。連用形に付くが、下が「き・けり・たり」ではないので完了「ぬ」ではない。

Q41. 答え：副詞の一部「げに」

解説：副詞「げに」（＝本当に、なるほど）の一部としての「に」。一語で覚える副詞表現。「本当にそう思う」。「げに」「すでに」「つひに」「いかに」など、副詞は一語まるごと覚える。

Q42. 答え：格助詞「に」

解説：「海」＋「に」＋動詞「漕ぎ出づ」。場所・方向を示す格助詞。

Q43. 答え：接続助詞「に」

解説：連体形「多き」（形容詞「多し」ク活用連体形）＋「に」。「言葉が多いのに、心は狭い」（逆接）。

Q44. 答え：格助詞「に」

解説：体言「御所」＋格助詞「に」（場所）＋ラ変「侍り」（「あり・をり」の丁寧語＝おります）。「私は、昨夜から御所におります」。「御所である」とは訳せないので断定ではない（断定の例はQ33「都人に侍り」＝都の人でございます）。

Q45. 答え：ナリ活用形容動詞「あらたなり」連用形語尾「に」

解説：「あらた」＋「に」＋「起こる」。「新たに起こる」。

Q46. 答え：完了の助動詞「ぬ」連用形「に」

解説：下二段「寝（ぬ）」連用形「ね」＋完了「ぬ」連用形「に」＋過去「けり」終止形。「眠ってしまった」。連用形＋「に＋けり」は「～にけり」＝完了のパターン（最頻出）。

Q47. 答え：接続助詞「に」

解説：連体形「深き」（形容詞「深し」ク活用連体形）＋「に」。原因「～ので」。「雪が深いので、道が見えない」。

Q48. 答え：格助詞「に」

解説：体言「都」＋「に」＋係助詞「は」。「都では花が咲いてしまった」。

Q49. 答え：格助詞「に」

解説：体言「夜半」＋「に」＋動詞「おどろく」。時を示す格助詞。「夜中に目を覚ます」。

Q50. 答え：ナリ活用形容動詞「をかしげなり」連用形語尾「に」

解説：「をかしげ」（＝趣ある様子の、語幹）＋「に」＋「ものし給ふ」。「趣のある様子でいらっしゃる」。

【第3部】応用編（Q51～Q80）

Q51. 答え：ナリ活用形容動詞「あはれなり」連用形語尾「に」

解説：「あはれ」＋「に」＋尊敬「おぼしめす」（＝お思いになる）。「しみじみとお思いになる」。

Q52. 答え：ナリ活用形容動詞「のどかなり」連用形語尾「に」

解説：形容動詞「のどかなり」連用形「のどかに」＋動詞「吹く」。「風がのどかに吹く」。語幹「のどか」＋活用語尾「に」。

Q53. 答え：断定の助動詞「なり」連用形「に」

解説：体言「男」＋「に」＋係助詞「こそ」＋「あり」＋過去「けり」已然形「けれ」（こそ結び）。「私は男であった（よ）」。「に＋こそ＋あり＋けれ」は断定の典型構文。

Q54. 答え：断定の助動詞「なり」連用形「に」

解説：体言「大納言」＋「に」＋係助詞「ぞ」＋「あり」＋過去「けり」連体形「ける」（ぞの結び）。「大納言であった」。

Q55. 答え：格助詞「に」

解説：連体形「知る」（＝知ること）＋格助詞「に」＋四段「及ぶ」未然形「及ば」＋打消「ず」。「～に及ばず」で「～するまでもない」。「知るまでもない」。「～ので／～のに」とは訳せないので接続助詞ではない。

Q56. 答え：断定の助動詞「なり」連用形「に」

解説：「知ら」（四段「知る」未然形）＋打消「ず」連体形「ぬ」が体言「人」にかかり、体言「人」＋断定「なり」連用形「に」＋係助詞「も」＋ラ変「あり」未然形「あら」＋打消「ず」。「物のあわれを知らない人でもない」。

※ 上が体言で「～でもない」と訳せる「に＋も＋あらず」は断定。

Q57. 答え：ナリ活用形容動詞「うれしげなり」連用形語尾「に」

解説：「うれしげ」（＝うれしそうな様子。「げ」は様子を表す接尾語）＋「に」（活用語尾）＋四段「笑ふ」。「翁はたいそううれしように笑う」。「げに」の形が見えるが、副詞「げに」（＝本当に）ではない。

Q58. 答え：ナリ活用形容動詞「いたづらなり」連用形語尾「に」

解説：「いたづら」（語幹）＋「に」（活用語尾）＋「月日を」＋四段「過ぐす」連用形「過ぐし」＋尊敬の補助動詞「給ふ」。「むなしく月日をお過ごしになる」。

Q59. 答え：格助詞「に」

解説：体言「山の端」（＝山の稜線）＋格助詞「に」（場所）＋四段「かかる」已然形「かかれ」＋存続「り」。「山の稜線に雲がかかっている」。体言に付くが、「山の端である」とは訳せないので断定ではない。

Q60. 答え：ナリ活用形容動詞「静かなり」連用形語尾「に」

解説：「静か」(＝しずかだ、語幹)＋「に」＋「待ちぬ」。「静かに待った」。

※ ナリ活用形容動詞「静かなり」の連用形は「静かに」。この「に」は語尾であって助詞ではない。

Q61. 答え：接続助詞「に」

解説：連体形「降る」＋接続助詞「に」。「雨がひどく降るのに、それでも参上する人がいる」(逆接)。「いみじう」は「いみじく」のウ音便。

Q62. 答え：格助詞「に」

解説：体言「神」＋「に」＋動詞「祈る」。対象を示す格助詞。

Q63. 答え：格助詞「に」

解説：体言「露」＋「に」＋係助詞「も」＋「ぬるる」(下二段「濡る」連体形)＋体言「袖」。「露でも濡れる袖」。原因・手段を示す格助詞。

Q64. 答え：断定の助動詞「なり」連用形「に」

解説：四段「来たる」連体形＋断定「なり」連用形「に」＋係助詞「や」＋ラ変「あり」未然形「あら」＋推量「む」連体形(「や」の結び)。「門をたたく音がする。人が来たのであろうか」。連体形＋「に」でも、「～であらうか」と訳せて下に「あらむ」があるので断定(接続助詞・格助詞ではない)。

Q65. 答え：接続助詞「に」

解説：連体形「仕うまつる」＋「に」。「お供申し上げると／お供申し上げていると」。

Q66. 答え：ナリ活用形容動詞「あらはなり」連用形語尾「に」

解説：「あらは」(＝明らかな、語幹)＋「に」＋尊敬「仰せらる」。「あらわにお命じになる」。

Q67. 答え：格助詞「に」

解説：「庭」＋「に」＋動詞「さす」。場所を示す格助詞。「庭に月の光がさし込んでいた」。

Q68. 答え：ナリ活用形容動詞「静かなり」連用形語尾「に」

解説：形容動詞「静かなり」連用形「静かに」＋動詞「思ふ」連用形「思ひ」＋丁寧の補助動詞「侍り」。「静かに思っております」。語幹「静か」＋活用語尾「に」。

Q69. 答え：格助詞「に」

解説：連体形「思ふ」(＝思うこと)＋格助詞「に」＋四段「たがふ」(＝食い違う)。「思っていたことと違う」。「たがふ」は「～に違ふ」の形で、比べる相手を「に」で示す。「～ので／～のに」とは訳せないので接続助詞ではない。

Q70. 答え：格助詞「に」

解説：体言「袖」＋格助詞「に」(場所)＋係助詞「ぞ」＋四段「宿る」連体形(「ぞ」の結び)。「月の光が(涙にぬれた)袖に映っている」。「にぞ」の下が「ある」ではなく動詞「宿る」で、「袖である」とは訳せないので断定ではない。

Q71. 答え：格助詞「に」

解説：体言「夜」＋格助詞「に」(時)＋係助詞「こそ」＋上一段「見る」終止形＋適当「べし」已然形「べけれ」(「こそ」の結び)。「月は秋の夜にこそ見るのがよい」。結びの「見るべけれ」が書かれていて、「秋の夜である」とは訳せないので断定ではない(断定なら「秋の夜にこそあれ」の形になる)。

Q72. 答え：格助詞「に」

解説：体言「親」＋格助詞「に」(受身の相手)＋禁止「な～そ」の間に「知られ」(四段「知る」未然形＋受身「る」連用形)。「親に知られるな」。

Q73. 答え：格助詞「に」(強意)

解説：四段「待つ」連用形「待ち」＋格助詞「に」＋同じ動詞「待ち」＋完了「たり」已然形「たれ」＋接続助詞「ども」。同じ動詞の連用形を重ねて意味を強める(ひたすら～する)。「ひたすら待ちに待ったけれども、来ない」。連用形に付くが、下が「き・けり・たり」ではないので完了「ぬ」ではない。

Q74. 答え：格助詞「に」

解説：体言「母君」＋格助詞「に」（比べる相手）＋上一段「似る」連用形「似」＋尊敬「給ふ」已然形「給へ」＋存続「り」。「この姫君は、母君に似ていらっしゃる」。

Q75. 答え：ナリ活用形容動詞「きよらなり」連用形語尾「に」

解説：「きよら」（語幹。＝気品があって美しい）＋「に」（活用語尾）＋尊敬の補助動詞「おはす」。「たいそう気品があって美しくていらっしゃる」。「に＋おはす」の形でも、上が形容動詞の語幹（上に「いと」が付いている）なので断定ではない。

Q76. 答え：格助詞「に」

解説：「親」＋「に」＋形容動詞「孝なる」連体形＋体言「人」。「親に孝行な人」。対象を示す格助詞。

Q77. 答え：格助詞「に」

解説：体言「人」＋格助詞「に」（受身の相手）＋「惜しまるる」（四段「惜しむ」未然形＋受身「る」連体形）＋体言「花」。「人に惜しまれる花」。

Q78. 答え：格助詞「に」（対象）

解説：体言「仏」＋格助詞「に」（動作の相手・対象）＋「花を」＋謙譲の動詞「奉る」。「仏に花を差し上げる」。

Q79. 答え：格助詞「に」

解説：「嵐」＋「に」＋動詞「散る」＋体言「花」。原因・手段を示す格助詞。「嵐によって散る花」。

Q80. 答え：格助詞「に」（目的）

解説：上一段「見る」連用形「見」＋格助詞「に」（目的：～しに）＋四段「行く」未然形「行か」＋意志「む」。「明日は、花を見に行こう」。連用形に付くが、下が「き・けり・たり」ではなく「行く」なので完了「ぬ」ではない。

【第4部】入試レベル（Q81～Q100）

Q81. 答え：格助詞「に」

解説：「求め」（下二段「求む」連用形）＋格助詞「に」（目的：～しに）＋「とて」（～と思って）。「（住むのにふさわしい）国を探しに（行こう）と思って出かけた」。連用形に付くが、下が「き・けり・たり」ではないので完了「ぬ」ではない。伊勢物語第九段（東下り）の冒頭。

Q82. 答え：断定の助動詞「なり」連用形「に」

解説：体言「何」＋「に」＋係助詞「か」（疑問）。連体形の結びとして「あらむ」「ある」などが省略されている。「あれは何であろうか」。「に＋か（＋あらむ）」の断定構文。

Q83. 答え：完了の助動詞「ぬ」連用形「に」

解説：「失せ」下二段「失す」連用形＋完了「ぬ」連用形「に」＋過去「き」已然形「しか」＋接続助詞「ば」（確定条件・原因「～ので」）。「しか」は過去「き」の已然形で、確定条件の「ば」に接続している。「京で生まれた女の子が、（任地の）国で急に亡くなってしまったので、（親は）このごろの出発の支度を見ても、何も言わない」。土佐日記（十二月二十七日）。

Q84. 答え：断定の助動詞「なり」連用形「に」

解説：体言「もの」＋「に」＋係助詞「こそ」＋結び省略（～あれ）。「（～詠じた）ものである（よ）」。

Q85. 答え：接続助詞「に」 **解説：**連体形「候ふ」＋「に」。接続助詞で「～していたところ」の意。枕草子「香炉峰の雪」段。「物語などをして集まり申し上げていたところ」。

Q86. 答え：接続助詞「に」

解説：連体形「給ふ」＋「に」。「中納言が参上なさって、（中宮に）御扇を差し上げなさんと」（単純接続「～と・～ところ」）。枕草子「中納言参り給ひて」の段。

Q87. 答え：格助詞「に」（時を示す）

解説：体言「あけぼの」＋格助詞「に」。「明け方に起き出して、東の空を眺める」。時を示す格助詞。

Q88. 答え：格助詞「に」

解説：体言「ふる里」(＝古い都。奈良の旧都)＋格助詞「に」(場所)。下の「ありければ」は「(姉妹が) いたので」の意の「あり」で、「ふる里である」とは訳せないので断定ではない。「思いがけず、さびれた旧都に、(美しい姉妹が) たいそう不似合いな様子でいたので、(男は) 心が乱れてしまった」。伊勢物語初段。例文中の「まどひにけり」の「に」は完了「ぬ」、**「往にけり」の「往に」はナ変動詞、「狩りに」の「に」は目的の格助詞。**

Q89. 答え：格助詞「に」

解説：体言「ものごと」＋格助詞「に」＋形容動詞「あはれなり」已然形「あはれなれ」(係助詞「こそ」の結び)。「季節が移り変わっていくさまこそ、何事につけても趣深い」。体言に付くので接続助詞ではない。徒然草第十九段。

Q90. 答え：断定の助動詞「なり」連用形「に」

解説：体言「男」＋「に」＋副助詞「し」(強調)＋「あれ」(ラ変已然形)＋「ば」(原因)。「私は男であるので」。「**に+し+あれば**」も断定の典型。

Q91. 答え：格助詞「に」

解説：体言「よろづ」(＝万事)＋格助詞「に」＋形容詞「いみじ」。「何事につけてもすばらしい」(「いみじ」は程度がはなはだしいことを表し、良い意味にも悪い意味にも使う)。

Q92. 答え：副詞「さすがに」の一部「に」

解説：「さすがに」は一語の副詞(＝やはり、なんといっても)。徒然草第十一段。「やはり住む人がいるからなのであろう」。

Q93. 答え：接続助詞「に」

解説：連体形「かすめる」(四段「かすむ」已然形「かすめ」＋完了「り」連体形「る」)＋「に」。「明け方の空がほのぼのと霞んでいるところに、人の声がする」。

Q94. 答え：格助詞「に」

解説：体言「世の中」＋「に」。「この世の中に」と場所・範囲を示す格助詞。伊勢物語第八十二段(渚の院)の在原業平の歌。「世の中に全く桜がなかったなら、春の人の心はのどかだっただろうに」。

Q95. 答え：格助詞「に」

解説：体言「心」＋「に」＋動詞「かかる」。場所・対象を示す格助詞。「心にかかるけれども、口に出さない」。

Q96. 答え：接続助詞「に」

解説：連体形「吹きたる」(四段「吹く」連用形＋完了「たり」連体形)＋接続助詞「に」。「風がひどく吹いているので、几帳の垂れ布がさやさやと鳴る」(順接)。「いたう」は「いたく」のウ音便。

Q97. 答え：格助詞「に」

解説：体言「けはひ」＋「に」＋動詞「目覚む」。原因・契機を示す格助詞。「眠いときも、人の気配によって、ふっと目覚めるものだ」。

Q98. 答え：格助詞「に」

解説：体言「世」＋格助詞「に」(伝える先)＋係助詞「も」＋下二段「伝ふ」連用形「伝へ」＋過去推量「けむ」已然形「けめ」(「こそ」の結び)。下に「あり」がなく、「世である」とは訳せないので断定ではない。「こそ～已然形」で文が終わらず「、」で続くので、「～けれども」と逆接で訳す。「中国の人は、これをすばらしいと思うからこそ、書き留めて世にも伝えたのだろうが、わが国の人は、語り伝えもしないだろう」。徒然草第十八段。

Q99. 答え：格助詞「に」

解説：「人ごと」(「ごと」は「それぞれ・～のたびに」の意の接尾語)＋格助詞「に」＋「言ふ」。「『しみじみとした趣は秋がまさっている』と誰もが言うようだが、それももつともだが、いっそう心が浮き立つものは春の景色であるようだ」。同じ文の「さるものにて」「気色にこそあめれ」の「に」は断定「なり」の連用形(「～であって」「～であるようだ」と訳せる)。徒然草第十九段。

Q100. 答え：断定の助動詞「なり」連用形「に」

解説：体言「水」＋断定「なり」連用形「に」＋ラ変「あり」未然形「あら」＋打消「ず」。「流れていく川の流れは絶えることがなくて、しかも、もとの水ではない」。「に＋あらず」で「～ではない」と訳せるので断定。方丈記冒頭の一節。